小金井市男女共同参画情報誌

かたらい

55号
2022 春

p2 特別企画
「また明日」から考える
男女共同参画

企画「生物学的な面からの性の多様性 2」

p5 寄稿 「ジェンダー」 脳・性別を超えた多様性
－女・男という２分割では説明できない脳の多様性とは何か？－
エガリテ研究所代表
佐藤　百合子さん

小金井で働く

p6 小金井から食文化を発信
西井　香春さん

p8 子どもの笑顔が見たくて
田頭　よしたかさん・祐子さん

第35回 こがねいパレット

p10 心にポッと灯がともるほめ方
－より良いコミュニケーションのために－

心にポッと灯がともる
ほめ方
～より良いコミュニケーションのために～

p11 第５次男女共同参画行動計画 －令和２年度 推進状況調査の報告について－

特別企画

「また明日」から考える 男女共同参画

NPO法人　地域の寄り合い所　また明日

「小金井市第6次男女共同参画行動計画」では、「人権尊重とワーク・ライフ・バランスを軸とする男女共同参画の実現をめざして」という基本理念を定めています。男女が互いに認め合い支え合いながら、個性と能力を十分に発揮することができ、一人ひとりが輝いて生きることができる社会の実現を目指し、基本理念を定めました。

その中で、ワーク・ライフ・バランスの実現には、仕事と家庭の両立を支えるための、育児や介護等への支援の取り組みや、生きがいを持って地域社会に関わっていくための、地域づくりの取り組みが必要です。

小金井市貫井南町にある、「地域の寄り合い所　また明日」では、アパートの1階の部屋を繋げた広い空間で、保育施設と高齢者の方向けのデイサービス、地域の交流スペースを、一緒に運営しています。平成26年の「かたらい40号」でも、運営している森田さんご夫妻にお話を伺いましたが、今回は地域づくり等の視点から、「また明日」での取り組みや、現在のご様子を、法人の代表森田眞希さんとスタッフの園村あゆみさんにお話を伺いました。

左が森田眞希さん、右が園村あゆみさん

◆育児支援の取り組み

前回の「かたらい40号」でのインタビューを受けた後に、「また明日保育園」という認可保育施設の運営も始まりました。「また明日保育園」は0歳児クラスから2歳児クラスまでの、合計定員12名の小規模な保育施設で、家庭的な雰囲気を大事にしています。

放課後の時間になると、学校帰りの子ども達が立ち寄っていったりしますし、夏休みや冬休みには、朝から来ている小学生もいます。中には、小学生の頃に来ていた子が中学生になっても来ていたり、高校生・大学生になった子がひょいと突然顔を見せに来たりもします。

子どもを連れて親子で遊びに来る方とかは、日常的にいらっしゃいます。コロナ禍であっても、拒まずに受け入れしています。育児相談も続けていますが、「何曜日の何時から育児相談です」って看板を出して、私がここで待っていても、相手の方は話しにくいですよね。ですから、「何時から育児相談してます」っていう看板は掲げていません。親子で遊びに来られた時に、その方の様子とか、声とかから、何かちょっと感じた場合には、こちらから声をかけて色々な話をして、そこから相談に進めていきます。「何か相談はありますか?」って言ったところで、すぐには話せないですよね。

◆介護支援の取り組み

前回インタビューを受けた際と変わらず、認知症対応型通所介護「また明日デイホーム」という、認知症専門のデイサービスの運営を続けています。定員は12名ですが、全員いらっしゃるという事はなかなかなく、ショートステイに行かれている方や、病院の受診でいらっしゃらない方もいますので、平均すると9人位とかですかね。曜日によって前後します。でも、デイサービスを利用していないけれどご近所として来ているという方がいたり、ご近所として来ているけれど認知症の症状がある方とか、色んな方がいらっ

しゃいます。

子ども達と関わってくれる方も多く、子どもの寝かしつけをしてからご自分のご飯を食べるという方がいたり、子ども達も「ばぁば来てー、本読んでー」って言ったりします。ですから私達も出来るだけ、年寄りっ子にしましょうねと話しています。

◆地域交流スペースとしての活動

特に「いつ、何時にやります」じゃなくて、日常的に沢山の方に自由に来て過ごしていただいています。小学生が自由に来て、受け入れているのもその取り組みです。昨年から目の前のけやき公園で、「道草市inけやき公園・NPO法人地域の寄り合い所また明日」として、主に坂下で商売をしている人達や農家の人達、芸術活動をしている人達や福祉職の人達、小金井市観光まちおこし協会と共にイベントを行っています。福祉職同士の繋がりだけではなく、業種を越えた地域の方との繋がりで実施しているので、言ってみれば、これも地域交流の一つになるのではないのかなと思います。

また、第三水曜日には、地域食堂の活動もしています。「子ども食堂」と言ってしまうと、「子どもだけなの?」と思われるかなと思い、うちでは「地域食堂」として実施しています。コロナ禍になってからは、密にならないよう、外にテーブルを出してみたり、キッチンカーをやってる友人に来てもらって、50食ぐらいをここで提供したりしています。50食全てなくなることがほとんどですね。大きい子達はここで食べていくし、小さい子達はそれを持ってお家へ。子どもだけの時も、きょうだいでの時も、親子での時もあります。

◆子ども達の様子から見える男女共同参画

遊びに来る小学生達は、けん玉や、だるま落とし、カルタなど、色々なもので遊んでいます。ここにはテレビもテレビゲームもないですが、そういったものがなければないで、ちゃんと楽しむ方法っていうのを、子ども達は知っているんですよね。子ども達の様子を見ていて、遊び方に関して男女で違いを感じるということはありません。男の子も女の子もおままごとで遊びますし、男の子がエプロンをしてフライパンを持っておままごとで遊んでいたりします。お父さんが家で料理をしている姿を見ていて、真似しているのかもしれません。昔と家庭の状況が変わってきたと感じた点の一つですね。

昔と変わった点だと、お子さんの送り迎えに来るお父さんが増えたというのもあります。昔だったら、お父さんが送り迎えに来たら、周りの人達はみんな「すごい」ってなりましたけど、今じゃ当たり前というか、お父さんの方が多い時もあるくらいです。

保護者の方のお話を聞くと、お父さんもお母さんもどちらもが、子育てや家事をやらないと、家のことが回っていかない、って話をよく聞きます。子どもはご飯を食べたらすぐにお風呂だし、すぐ眠くなるし、大変ですよね。お母さんだからコレ、お父さんだからアレっていうのではなく、それぞれが得意なものを役割分担しているという家庭が増えてきたように感じます。

◆子どもと高齢者との関わり

「また明日」で時間を過ごした子ども達は、高齢者の方に対して、自分のおじいちゃん、おばあちゃんのように接しているように感じます。小学生でも、一見気にしてないように見えるのに、「最近誰々さん来てないね」とふと言ったりします。落ち着かなくて、「もう帰る時間かしら、私は帰りたいわ」なんて言っている高齢者の方に、「これ作ったからあげます」と言って手作りのものを渡したりしています。ある時、中学生が3人で遊びに来ていたのですが、その内の1人は小学生の頃から毎日のように、ここに来ていた子だったんです。その日来ていた高齢者の方が、「何年生？どこの中学なの？」っていうことを、何度も聞いていました。小学生の頃からよく来ていた子は、その都度ちゃんと答えていましたが、他の2人は、ちょっと困ったような表情をしていたんですね。そしたら、小学生の頃からよく来ていた子は、他の2人に対しても、さりげなくフォローをして、高齢者の方との会話が続くようにしていました。その高齢者の方が帰った後に、その子達とおやつを食べながら、「認知症という言葉を聞いたことある？」って尋ねてみました。そうしたら、小学校の頃からよく来てる子は、学校で習ったという話を、ちゃんと説明してくれたんです。子ども達は「また明日」に来る高齢者の方達のことを、何となくちゃんと分かってるし、気にかけてるんだなっていうのを感じましたね。

認知症の方にとって、認知症の症状が出た時に、「それは今言いましたよね」とか、「それはもう食べましたよね」、と否定され続けられるのはとても辛いことです。認知症の方でなくても、誰だって辛いですよね。「それをやらないでください」とか、「そのままそこにいてください」と言われるのと、「この子のお着替えを手伝ってもらえますか」と頼りにされたり、着替えの手伝いが終わったら、「ありがとうございます、助かりました」と言われるのとでは、後者の方がやっぱり嬉しいですよね。どんな子でも、どんな方でも、誰かに頼まれた、誰かの役に立った、という経験は、日本人がとても低いと言われている自己肯定感の向上に繋がってきます。ですから、私は子ども達にも色々なことをお願いするし、頼んでやってもらったことには、どんなことであっても「ありがとう、助かった」と伝えています。施設に来ている高齢者の方々も、子ども達にそういう言葉をよくかけてくれるんです。そうしたら、子ども達も嬉しいですよね。以前に、ここで別の取材を受けた高齢者の方が、取材の中で「ここに来ていて一番楽しいと思うことは何ですか」と質問されたのですが、その方は「一番嬉しいことは、まだ生きていていいよと言ってもらえてると感じることです」とおっしゃったんです。「まだ役立ってる、こんな私でも頼られているんだと感じられる、だから、まだまだ生きていていいんだ」ということですよね。認知症という症状をお持ちの方だからこそ、そういう思いを持ってもらいたいと、すごく感じました。

◆みんなの「お隣さん」に

色々な方に自由に来てもらえるよう、会員登録等も行っていません。よく例えで説明するのは、お隣りに住んでいるおばあちゃんちに遊び行くのに、登録しなきゃいけない、とかないじゃないですか。隣のお家でお茶飲んだからお茶代払う、っていうこともないですよね。来てくれる子ども達にとっての、あるいは、ちょっと立ち寄るご近所の人達にとっての、「お隣さん」だと思って、ここに遊びに来てほしいですね。

取材を終えて

取材に伺った際も、高齢者の方と子ども達が一緒になって過ごしている姿がたくさん見られました。高齢者の方も子ども達も、とても楽しそうに笑っていたのが、印象的でした。（事務局）

企画「生物学的な面からの性の多様性 2」

「ジェンダー」 脳・性別を超えた多様性

― 女・男という２分割では説明できない脳の多様性とは何か？―

エガリテ研究所代表 佐藤 百合子（さとう ゆりこ）

前号では、主として遺伝子の面からの説明として女性・男性を見てきた。そこでは、もはや遺伝子からは、女性、男性と分けることはできないのではないかと思われてきている。しかし、遺伝子の役割は、受精してから、女性の体を男性に変化させるホルモンを出すまでである。そこから先は女性ホルモン、男性ホルモンの役割であるが、決してそれはきれいに分かれるものではないことが最近わかってきた。ここではイスラエルのテルアビブ大学の教授であるダフナ・ジョエルと、サイエンスライターであるワイツマン科学研究所のルバ・ヴィハンスキが書いた、「ジェンダーと脳」（原題：“Gender Mosaic”訳者：鍛原多恵子）を中心に、説明していきたいと思う。

ヨーロッパで平等主義が台頭したのは17世紀から18世紀とされている。その時に女性の地位が問題になったという。本来、男女ともに平等であるものが、当時の女性のあり方を見ると男性に従属的地位にあったからである。男性と同等の力が女性にあるとわかるのは、男性の恥であり、そのため男女の脳の違いから働き方の違いまで調べ、あるゆる観点から女性は男性より劣っていると証明しようとした。そして広く一般的に、男性と女性とは異なる所があるとみなし、中には研究者でさえ、誤った結論の論文を書いている者も大勢いる。

しかし、この20年から30年、トレイシー・ショールズ、マーガレット・マッカーシー（ともに脳科学の研究者）らによって、長いストレスを与えると、脳の「男性」と「女性」が反対になることが分かった。「人の生殖器は一生を通じてその形態が変わらないが、脳はそうではない。生殖器は大体、女性と男性という二つの明確に異なる形態をとるが、脳はその二つを超えうる形態をとる。大半の脳は、女性的な特徴と男性的な特徴から構成されるモザイクである」といわれる（「脳とジェンダー」47頁）。

彼女らが28ー個の脳を調べた時、「際立って男性的」または、「際立って女性的」な脳は2%、中間的な脳は4%であった。そのほかの脳では、「際立って女性的」、「際立って男性的」、「中間」の3つの形態が、それぞれ独自の組み合わせをもって存在していた。つまり、私達一人一人が、男性的、女性的な特徴を併せ持っていて、女性的、男性的な特徴のみを持つことは稀（全体の10%）なのである（同書96頁）。

私達の中に男性脳と女性脳、中間脳が混在しているということは、「ジェンダーごとに特徴はそれぞれ一貫している」という見方が一般的であるために、なかなか認められない。人はみな相手の中に己の好みのジェンダーを見つけたいと思うのだ。また、平均値を出して、男性と女性とは違う脳を持っているという研究者たちもいる。しかし、本来大多数の脳は、「女性的な脳」、「男性的な脳」、「中間的な脳」が、個人ごとにモザイクを形成しており、それを集めて平均値を出すことには意味がなくなってくるのである。この脳のモザイク（多様性）は、性自認（自分の性別をどのように認識するか）についても顕著になってきているようである（同書136頁）。

フェイスブックで始めたアンケートで、最初は「男性、女性」の一方から選んだのが、「ここ数年の間には71の選択肢が増え、「パンジェンダー」、「ジェンダー・コンフォーミング」（いずれも性自認が既成概念に当てはまらないと考える人）もあった」（同書137頁）そうである。また、「出生時に与えられる男女いずれかの性別に当てはまる」と考える「シスジェンダー」という人々の中にも、「男女双方に属すると感じる人もいれば、どちらにも属さないと感じる人もいる」（同書138頁）。トランスジェンダーの人にも差があることから考えると、もはや「性の多様性」を病理として扱うのではなく（同書139頁）、性自認がもはやバイナリー（注）な枠組みには収まらない（同書140頁）といえるであろう。それは決して男性、女性を否定するものではなく、ジェンダーのない、「女性、男性、中間性などいずれかの生殖器を持つ人はみんな、この世界にあるすべてのものを自由に選べる」（同書179頁）のである。これが本当の「多様性」ということであろう。

注：「男性、女性」という2つの枠組みのことを指す。

企画「生物学的な面からの性の多様性」を通じて

54号、55号と続けてみると、新しい方向性がよくわかる。もはや男女という関係ではとらえきれない事象が起こっているのである。

（佐藤）

小金井で働く

小金井から食文化を発信

小金井市内にある三光院にて、長い伝統を誇る「竹之御所流精進料理」を引き継ぎ、料理長を務める西井香春さんに、フランスでの生活のお話や、精進料理との出会いなどを伺ってきました。

西井 香春（にしい こうしゅん）さん

◆フランス料理

私は、中国で生まれて横浜で育ちました。海外に関心を持っていて、当時は海外に行くことが気軽には出来ませんでしたが、フランス在住の親戚を頼り、16歳でフランスに渡ったのです。

フランスでお世話になった家庭は、朝から晩まで沢山のお客様が訪れ、専門の料理人が毎日料理を作っていて、フランス料理はその時に見よう見まねで覚えました。

1964年の東京オリンピック開催後は、海外と往来出来る機会が増えましたが、その頃の日本ではまだフランス料理は広く知られていなかったので、帰国するたびに友人からフランス料理を教えて欲しいと頼まれて教えていました。

フランスと日本を行ったり来たりする生活を送っていましたが、年を重ねるごとに日本で落ち着いて暮らしたいと思うようになり、40歳で日本に帰ろうと決心したのです。日本に帰り、自分には何が出来るかと考えた時に、これまでいろんな方に教えて欲しいと言われてきたフランス料理なら教えることが出来ると思い、料理教室を開こうと決めました。しかし、いざ日本で料理教室を開くとなると、今まで自分がいた環境の中で得た知識や経験だけではなく、より専門的な知識なども必要なことに気づき、フランス料理学校で2年間料理を学び、その後六本木でフランス料理教室を始めました。

◆フランスで感じたこと

フランスではパリに住んでいましたが、自然の中で暮らすことを大切にしていて、週末は郊外にある家に行って過ごしていました。その地域の人が結婚したとき、親から古い家をプレゼントされ、その家を自分たちの手で直していくわけです。子どもが生まれたら、子ども部屋を作るなど、一生かけて自分たちの家を作り上げています。そうして家族というものが続いていくというところがとても素敵だと感じました。

私の親戚が役所で結婚式を挙げた時は、区長さんが結婚式に立ち合いをして二人を祝福します。人生の中で結婚式というのはとても大事なことで、それに人が携わる、大切なことに時間をかけているところがすごいと思いました。

◆精進料理との出会い

パリで生活をしていた時に、10代でフランスに行ったので、日本について質問をされた時に、答えることが出来ず、自分が日本について何も知らないということを日々感じていました。

帰国した後に、日本にいる以上は日本のことをもっと勉強したい、料理を通じて学べる機会がないかと10年程探していました。当時は習い事として、いけばな、お香、お茶などがありましたが、これらは、お寺と関係していることに気がつき、日本の文化を学べるのではないかと思ったのです。

自分が一番落ち着く場所である「屋根の瓦、漆喰の白さ、木立造」というのがお寺には全てあります。とくに三光院は、京都の尼門跡寺院で皇女が日々食す精進料理を作る流れを受け継いでいるということで、私の求めていたものだと思いました。三光院に通っていた時に、小金井市の、野川やはけの道などの自然豊かな景色にも魅了されました。

初めて、御住職の料理を食べに伺ったときに、作ったものをすぐに食べさせたい一心で料理を運ぶ姿にとても感動しました。

一番惹かれたところは、最後に出てきた「ごはん」でした。前日に雨が降り、ぬれ落ち葉を掃くのがとても大変だったそうで、蒸かしたお稲荷さん、松葉を表現した揚げそうめん、ゆずの皮を型で抜いて葉っぱの形にしたものがからまり、ぬれた庭前の美しさを盛り込んでいて、自分が感じたことが一つのお椀に表現されており、とても感動しました。それを見て、これが私の求めていたものであり、この人しかいないと思い、料理教室にすぐに申し込みました。

初めて料理教室に行った時には、私が持っていった水かけ菜の説明を気に入ってくださったのか、御住職から、あなたには一対一で教えたいと言ってくださり、こんなありがたい話はありませんでした。その後、京都のお寺で開いてもらった誕生会で、日本の文化を数多く継承している尼門跡寺院の素晴らしさに感動し、ここしかないと思いました。そして50歳になった時から竹之御所流精進料理に携わりました。

◆竹之御所流精進料理

日本の代表する文化を数多く継承している尼門跡寺院で、これからも守っていかないといけない文化の一つが、竹之御所流精進料理です。

私一人が作り上げてきたのではなく、七百年近く守ってきた変わらない味なのです。料理を作る人が修行をしている尼僧なので、教えられた味をそのまま引き継いでこられたのだと思います。そして純粋で欲がなく、とても自然体な料理です。

この素晴らしい料理を自分で身につけて、後世に残していかないといけないと思って頑張っています。その思いで続けています。

◆今まで男女の差を感じたこと

フランスでは男性、女性の差をあまり気にしたことはありませんでした。日本では、食事にお客様を招いた時、夫が主に話し、妻は控えめな場合が多かったと聞きますが、フランスでは、招いた主人の隣には主客の妻が座り、その隣には次の客の夫が座り食事をするので、夫婦が対等に話さないと、会話が成り立たず、困ってしまうのではないかと思います。

日本でワイン会を開いていた時は、皆さん夫婦で参加をしていました。仕事など目的がある食事会は日本でもあるけれど、夫婦で楽しく参加する会は珍しいと言われていました。

◆これから

料理を通して、日本の素晴らしい文化や伝統などを継承し守っていくことが、私の役目だと思っています。せっかく尼門跡寺院の流れを汲むところなので、日本の文化を、いろんな角度から多くの方に興味を持ってもらえるよう、様々な活動をしています。書道、写仏、禅語などの教室や、秋には尺八、いけばな、お抹茶のイベントを開催しました。お花まつりなど、小さい子にも親しんでもらえる機会なども作り、日本の良さをこれからも発信していきたいと思います。

取材を終えて

今回お話を聞き、フランスの文化と日本の文化を様々な形で伝え続け、自分で人生を切り開いてきた西井さんの芯の強さを感じました。世界に誇る日本文化をこれからもっと学んでいきたいです。

（櫻井）

小金井で働く

子どもの笑顔が見たくて

絵本作家・イラストレーターの田頭よしたかさんと祐子さんご夫婦に、それぞれの活動やご家庭でのお話を伺ってきました。

田頭（たがしら） よしたかさん・祐子（ゆうこ）さん

◆よしたかさんのこれまでのお仕事の活動内容について教えてください

武蔵野美術大学を卒業して、最初は先輩のデザイン事務所に勤めていましたが半年程で辞めて、それからずっとフリーで仕事をしています。就職活動をしていた時に、絵を見せたら仕事をしてみないかと言われ、それからほんの少しですけど、外注で請け負っていました。デザイン事務所に勤めていた頃、印刷会社とは関係があったので、フリーになってもなんとかやっていけるんじゃないかと思いました。30歳くらいまでは広告やポストカードの仕事が主でした。30歳を過ぎた頃に絵本の仕事が入ったんです。元々学生の頃から絵本の仕事がしたかったということもあり、広告と絵本の二本立てみたいな形で今まで来ています。

私と同じ故郷の山口県に住んでいる、ズッコケ三人組の作者の那須さんと一緒に、小さい頃の遊びとか、育った環境をテーマに童話や絵本を4冊つくりました。

◆なぜ絵本をつくりたかったのですか？

大学の時に「劇団むさび」というのがあり、そこで芝居をしていたんです。主に舞台装置をしていたんですが、絵本は似ているんです。大げさにいうと役者がいて、照明があって、舞台装置があってというのを全部一人で出来るもんですから、これは面白い仕事だなと思っていました。そんな発想で絵本をつくりたいと思っています。

よしたかさんの切り絵作品

◆絵本づくりで意識していることは？

笑ってほしいというのは基本的にあり、これは面白いな、笑えるなというようなことをいつも考えています。

男の子、女の子、子ども、大人関係なく、楽しいことは楽しいし、面白いことは面白いから、面白い絵本ができたらみんな喜んでくれるんじゃないかと思います。純粋に絵本を楽しんでほしいから、勉強になるとか、何かを覚えてほしいとかではなく、読んだら「忘れちゃった」でもいいから「ああ、楽しかったー」で終わるような絵本が、本当は理想だと思っています。

◆最初から自分の思うように絵本の仕事が出来たのでしょうか？

いえ、難しかったです。ただ絵本というのは、編集者が間にいますから、常に打ち合わせをしながら、ここの場面はこうしよう、いや、こうした方が面白いとか一緒になってつくるものです。ですから最初に思っていたストーリーとは全然違うものになっていたりとか、指摘されて直したら、ものすごく良くなったりとかはよくあります。

一番大変なのは教科書です。いろんな専門の方が一つ一つ細かくチェックするんです。作者が一人いて、編集委員が十人くらいいるんです。大変な仕事ですが、子どもが小学生になり、初めて見る教科書の絵だと思うから頑張りますけど…。

◆祐子さんのこれまでの活動について教えてください

私も同じ大学の短大で、卒業してから、はた織りを教えてくださる方のデザイン事務所に通い、内弟子のような形で織りを学びました。

結婚してからも、手織りは展示販売会などを続けていましたが、出産後は断念し、野川沿いのヨモギとか自然素材での草木染めにシフトしました。その後に、年が離れて3人目の子どもが生まれたので、もっと子育てを楽しもうと思いました。主婦業と夫の仕事のサポートをしながら、手仕事を通して自分の暮らしを楽しく、豊かにデザインしたかったんです。

それから公民館の講座に参加したり、近所で生協のグループをつくって共同購入を始めました。この二つの活動が、私にとっては社会に対し目を開かせてくれた、地域の学校だったと思っています。そこで地域づくりをしている仲間に出会い、普段の暮

らしの中でものをつくり、育て、自分たちの街を良くしていくということが、だんだんつながってきたんですね。

公民館活動を通して、「子育てって親だけでするもんじゃないよね」という思いが強くなり、子どもの育つ環境として、プレーパークづくりの講座を開催し、「プレーパークをつくる会」を立ち上げました。

祐子さんの手織り・手紡ぎ・草木染作品

◆ご家庭での役割分担について

よしたかさん：妻が仕事をするようになってから見ていると、かなり忙しいんですよ。とてもじゃないけれど、家の中のことは私もやらないともたないなと思いました。

祐子さん：元々子育て中から、私がいなくなったらこの家のことが何も動かなくなっては困るわけだから、夫も家事をしていくというのは当たり前、と私は思っていました。私はアンペイドワーク、要するに通貨は稼いではこなかったわけですけれども、支出を抑えるというようなこととか、夫に通貨が集中出来るように環境づくりをしていくというところでは、仕事をしていたと思っています。

社会の中で仕事をするようになってから改めて、主婦業は家庭の中でのプロデューサー、あるいはコーディネーターという役割なんだと、大きな仕事だと実感しています。家族が自立出来ることを前提に、家庭の中のバランスを見ながら、今はこの形でやっていこうと、折々で役割分担も変えていきました。

子どもたちも必要なことは自分たちで考えて動くようになり、夫もごはんを作るようになりました。私も理想を子どもや夫に求めるのは、とても失礼だと段々分かり、どうしたらお互いが気持ちよく過ごせるかということを軸にしながら、子育てや家事の割り振りをしてきました。

◆これから挑戦したいことは？

よしたかさん：自分の絵がもっと上手くなりたい。仕事として頼まれて描いてきたものですから、ほんとに、「さあ、どうだ」っていうような絵を描けたのかな？というのがどうしてもあるんです。あと何枚描くかわかりませんけど、本当に満足する絵を描くという気持ちで仕事したい。あとつくりたかった絵本がまだ何冊もあるんです。それを現実にしたいなというのはあります。

祐子さん：地域で絵を皆さんに見てもらうとか、子どもと一緒に絵本を使ったワークショップをするとかの、場づくりが出来たらいいなと思っています。

夫の絵や絵本が子どもたちとの体験学習につながっていったら楽しいし、なかなか力を発揮出来ない環境にいる子どもたちの背中を「大丈夫」と押せるお手伝いが出来たらいいなという夢はあります。

◆家族関係で大切にしていることは？

よしたかさん：なにかあると話をする方だと思います。解決するかどうかは別にして。家でずっと仕事してると年がら年中顔を合わせているんです。するとなにかの拍子ですごく嫌な思いをお互いがしてたら、仕事にならない。だからなるべく話をして良い方に持っていきたいというのはお互いあると思います。

祐子さん：お互い気持ちよく嬉しい方向に行くために、逃げないで話をするという価値観は一緒だったので、良かったなと思います。子どもたちも三人三様ですけど親のことを見つめながら、時には辛辣なアドバイスもくれますし、親から自立して育ってくれたのは感謝ですね。

彼のマネージャーのようになって仕事を手伝った方がいいのかなと思った時期もあったんですが、そうすると私のタイプでは家族とか夫婦とかが果たして維持出来るのかなと思うこともあり、その時期は、仕事環境づくりを私がしていくと決めました。今は何を優先すべきか、自分を立て直ししながら暮らしてきた気持ちはわかって欲しいと、ぶつかりながらも、その都度出して、自分も整理していく。そこをなんとか一緒に出来たのはありがたいですね。

◆若い方に向けたメッセージ

よしたかさん：若い人と話していて、あの人誰だっけ？というのがしょっちゅうあるんですが、こっちはものすごく頑張って思い出そうとしてるのに、スマホで簡単に答えを出されてしまうと、少しがっかりしますね。思い出すのだって楽しみの一つですから、もう少し待ってほしいなと思います。

祐子さん：子育て中の方には、「大丈夫。もっと子どもに任せていこうよ」と伝えたいです。そのためにはちょっと引いて見ていくのが大人の役割かなと思います。第三の大人とか斜めの関係とか言いますけど、地域の中にはそういう方がいっぱいいます。たくさんの人の中で子どもが育っていく社会にしたいので、「なったらいいな」、じゃなくて、「みんなで一緒につくろうよ」、おせっかいおばさんの気持ちで応援しています。

取材を終えて

ご夫婦の温かなお人柄のおかげで終始、和やかな雰囲気でした。

祐子さんの『暮らしを楽しく豊かにデザインする』、よしたかさんの『笑えること、面白いことを常に考えている』という言葉に、お二人の価値観が深いところで、つながっているのだなと感じました。私も日常を楽しく豊かにするのを心がけたいと思います。

（秀澤）

第35回 こがねいパレット

心にポッと灯がともる ほめ方

～より良いコミュニケーションのために～

講師：松本 秀男 さん
（一般社団法人　日本ほめる達人協会 専務理事）

令和3年11月20日（土）に第35回こがねいパレットを開催しました。

今回は、よりよいコミュニケーション作りについてお話いただきましたので、その一部をご紹介します。

こがねいパレットは、公募の市民実行委員が企画・運営しています。
第35回こがねいパレットの詳細は「記録集」をご覧ください。市ホームページにも掲載しています。

男女共同参画のカギは「ほめる」こと？

日本ほめる達人協会のミッションは、「誰もが尊敬しあえる世界にする」であり、それには「ほめる」という事が一番良いアプローチだと思います。国が男女共同参画の方針として掲げる、「男性、女性が意欲に応じてあらゆる分野で活躍できる社会」の実現には、協会の「誰もが尊敬しあえる世界にする」という考えが重要となります。

ある企業が、夫婦双方に「生まれ変わっても同じ人と結婚したいか？」という調査をしたところ、「結婚したい」と答えた夫は66％、妻では約50％でした。この数値の差のヒントは「家事」にあると考え、更に調査をしたところ、家事をやっている側とやってもらっている側の気持ちに、ギャップがあることが分かったそうです。お互いに不満を持っていたのです。夫は「やっても文句を言われる」、妻は「中途半端な出来でいやだ」、と思っているわけです。これに対して、夫は家事の技術をしっかり覚え、妻はほめるという事を学ぶべきだと思ったそうです。

「ほめる達人」＝「ほめ達」ってどんな人？

協会の方々は、「ほめる」ということを、「価値を発見して伝えること」と定義しているそうですが、この「価値」とは、①人、②物、③出来事、の3つと考えているそうです。「人、物、出来事の価値を発見して伝える」こと。これが出来るのがほめ達という事だそうです。

ある飲食店でのこと。店長からは、仕事が遅いと思われていた一人の従業員の方が、仕事の丁寧さを褒められたところ、それ以降、その人を中心に店中に笑顔と活気があふれてきたそうです。短所と思えても、実はそれは長所が形を変えた「人の価値」として発見できるのが、ほめ達だそうです。

物の価値とは、身の回りにある物だけでなく、家事や仕事、役割、商品やサービス等に、どんな価値があるのかということ。それを言葉にして、周りに伝えることが出来るのが、ほめ達です。

いい出来事は価値を見つけやすいですが、ピンチやトラブル・失敗にも、「未来の自分への、成長という大きなプレゼントになるのではないか」と考えられるのがほめ達だそうです。

使い方に注意！

気を付けなければいけないのは、「ほめる」ことを、相手をコントロールすることに使わないようにすることです。ほめることは自己完結であり、ほめようが何しようが、相手を変えることは出来ないそうです。

また、「ほめる達人」を目指すなら言わない方がいい「言葉の3D」があります。「でも」、「だって」、「どうせ」の3つです。この「3D」を口にしてしまうと、価値を発見する考え方ではなく、脳が諦めモードになってしまいます。どうしてもDが使いたければ、「だからこそ」をお使いください。

ほめるのが照れくさいあなたにも

①挨拶に何か加える、②握手するように相手と目を合わせる（但し見すぎない！）、③話しを聞く際に、目を見る、うなずく、相槌を打つ、繰り返すなどのことが、「ほめる」につながるといいます。

そして、使えば「ほめ達」になれる3つのS。「すごい」、「さすが」、「すばらしい」。さらに加えて「そうか、そう来るか」を使えば、もう立派なほめ達です。「惜しい」、「ありがとう」も使って、自分や相手の成長を見守ってください。

こがねいパレットに参加して

今回の講演の内容は盛りだくさんで、中々まとめるのが難しかったです。でも皆さん、大いに共感するところがあり、有意義でした。

（佐藤）

「第５次男女共同参画行動計画」

ー令和２年度 推進状況調査の報告についてー

市では、男女共同参画社会の実現のため、平成29年3月に第5次男女共同参画行動計画を策定しました。

本計画は、計画期間を平成29年度～令和2年度とし、基本理念を「人権尊重とワーク・ライフ・バランスを軸とする 男女共同参画の実現をめざして」と定めています。

この基本理念を具体的に推進していくため、基本目標1「人権が尊重され、多様性を認め合う社会をつくる」、基本目標2「ワーク・ライフ・バランスの実現した暮らしをめざす」、基本目標3「男女共同参画を積極的に推進する」という、3つの基本目標を掲げています。

■令和２年度 推進状況調査結果

基本目標１では 60 事業、基本目標２では 35 事業、基本目標３では 14 事業、合計 109 事業の実施内容等について調査しています。

○具体的な取り組み

＜審議会等女性の参画推進＞

男女共同参画社会の実現のためには、女性が政策・方針決定の場へ参画することが重要です。

また、審議会等の委員構成は、男女に偏りがないように配慮することが必要です。改選時には、できるだけ女性委員の登用を図るなど、様々な分野へ、女性の参画の促進に努めています。（下表）

＜男女共同参画情報誌「かたらい」発行＞

男女共同参画施策の推進のため、市民編集委員制を導入し、情報誌「かたらい」を発行しています。

令和２年９月発行の第 52 号では、「働き方・暮らし方の変化（テレワーク）」、「いくつになっても夢をあきらめない」という２つの企画、令和３年３月発行の第 53 号では、特集「『男らしさ』について考える」などを掲載しています。

今後も、市民に男女共同参画に関する情報を発信し、意識啓発を図っていきます。

＜こがねいパレット＞

男女共同参画社会実現のための啓発事業として、講演会等を市民実行委員が企画、運営しています。

令和２年 11 月８日に開催した第 34 回こがねいパレットでは、「ダメでいい、ダメがいい―ありのままを認めれば子どもたちは最高に輝く―」をタイトルとした講演や、こがねいパレットに賛同する市民団体の紹介等を行いました。

「こがねいパレット」は、「いろんな色を持つ、いろんな人たちが自分の色を大切にして、出会い、交流し、それぞれの色を認め合い、ときには、いくつかの色がまざりあって、新しい色を織りなしながら、誰もが楽しく幸せに暮らせる豊かな社会をつくりだそう」という願いが込められています。

■男女平等推進審議会からの提言

令和４年１月 21 日に、市の附属機関である男女平等推進審議会から、本計画の推進等について提言をいただきました。

「提言書に記載されている意見（一部抜粋）」

▷令和２年度実績に対する評価及び報告書について

▷今後の事業評価について

■その他

報告書および提言書は、情報公開コーナー（市役所第二庁舎６階）、図書館本館、企画政策課男女共同参画室（市役所本庁舎２階）および市ホームページで閲覧できます。

（表） 議会・行政委員会等女性の参画率

議会・行政委員会等 ＼ 人数等	小金井市 ※令和３年４月１日現在				多摩26市 ※令和３年４月１日現在				東京都 ※令和２年４月１日現在 ※議員数は令和３年４月２０日現在			
	機関数	総　数	女性の人数	女性比率	機関数	総　数	女性の人数	女性比率	機関数	総　数	女性の人数	女性比率
議　　会	－	24	9	37.5%	－	755	213	28.2%	－	126	37	29.4%
行政委員会（教育委員会ほか）	6	31	7	22.6%	195	1,061	171	16.1%	9	91	15	16.5%
附属機関（男女平等推進審議会ほか）	46	543	179	33.0%	1,122	14,425	4,152	28.8%	54	707	235	33.2%
その他審議会等（行財政改革市民会議ほか）	21	227	85	37.4%	876	13,087	4,894	37.4%	172	1,898	621	32.7%
管理職の在職状況	－	66	11	16.7%	－	2,909	513	17.6%	－	3,447	695	20.2%

かたらい 2022 55号

女性総合相談

生活上のいろいろな悩みについて、女性カウンセラーが一緒に考えます。夫との関係、家族のこと、職場での人間関係、近所付き合いなど、ひとりで悩まず、まずはご相談ください。

- ●相談日時：原則、毎週金曜日と第２木曜日　午後１時３０分～午後４時３０分
- ●場所：市民相談室（市役所第２庁舎１階）
- ●相談方法：電話または面談（要予約）
- ●予約先：企画政策課男女共同参画室　☎０４２－３８７－９８５３
- ●費用：無料　●保育：１歳以上～未就学児が対象（要問合せ）

※プライバシーは守られます。

東京ウィメンズプラザ相談室のご案内

一般相談

配偶者からの暴力（ＤＶ）、デートＤＶ、セクシュアルハラスメント、夫婦や親子の問題、生き方や職場の人間関係など、さまざまな悩み相談をお受けします。

●ＴＥＬ：０３－５４６７－２４５５
●日時：毎日　午前９時～午後９時
※年末年始を除く。

男性のための悩み相談

夫婦や親子の問題、生き方や職場の人間関係、セクシュアルハラスメントやＤＶなどの暴力の問題など、男性の抱えるさまざまな悩みに男性相談専門職員が対応します。

●ＴＥＬ：０３－３４００－５３１３
●日時：月曜日・水曜日　午後5時～午後8時
土曜日　午後２時～午後５時
※祝日・年末年始を除く。

匿名で相談できます。相談は無料です。秘密は厳守します。

「かたらい」について読者の方から意見・感想等を募集しています。

氏名（ふりがな）、ペンネーム（記載がない場合はイニシャルとします）、連絡先を明記し、直接、郵送またはファクスで企画政策課男女共同参画室へご提出ください。　※一部抜粋して掲載させていただくことがあります。

〈提出先〉〒184-8504 住所不要　企画政策課男女共同参画室　FAX：042-387-1224

編集後記

54号に引き続き、55号での脳の構成とジェンダーの問題は、きわめて基本的なものです。研究者たちの間では、知れ渡っていて、私達はこれから勉強しなければならないと思います。これは全世代として必要なことだと思います。

（佐藤 百合子）

今回は、西井さんの雅な精進料理の奥深さに接することができたり、田頭さんの絵本に出会えたりと、私の中で新しい扉が開くような体験でした。どうもありがとうございました。

（山本 紘衣）

小金井市や男女共同参画について改めてアンテナを張るようになりました。様々な人と関わり、いろいろな視点を持てるようになる編集委員に面白さを感じています。

（秀澤 文子）

今回初めて「小金井で働く」の記事を担当させて頂いきました。すこしでも多くの方に読んでいただければ嬉しいです。ご協力頂きました皆様、ありがとうございました。どうぞよろしくお願いします。

（櫻井 愛）

寄稿や取材にご協力いただきました皆さまに、この場をお借りして御礼申し上げます。

（男女共同参画室）

「かたらい」は、公募による市民編集委員が、企画・取材・執筆を行っています。

小金井市男女共同参画情報誌「かたらい」第55号　2022（令和４年）３月発行／企画・編集：かたらい編集委員会
発行：小金井市企画財政部企画政策課男女共同参画室　TEL：042-387-9853　FAX：042-387-1224
編集委員：佐藤 百合子　山本 紘衣　秀澤 文子　櫻井 愛　男女共同参画室／監修：高橋 道子（東京学芸大学名誉教授）

古紙を配合しています。